

Sociology Next 40

— 社会学部創立40周年を迎えて —

関西大学社会学部が文学部から独立したのは1967（昭和42）年4月。新聞学科を母体として生まれた。

近年の学部紹介パンフレットの表紙には、ジンメル、フロイト、ウェーバーの肖像が掲載され、本学部が現代的課題を追究しつつも、その背骨には確固とした古典と理論があることを象徴している。もちろん、この三人が現在の社会学部を象徴するのかどうか意見もあるようだが、少なくとも過去の40年間、社会学や心理学、あるいは経済学の大家の理論をベースに、現代の日本社会の問題点をさまざまな視点から分析・解明する努力がなされ、多くの研究成果を得てきたことは自他ともに認めるところである。

40年前の創設に至る道は決して平坦ではなかったと「関西大学120年史」には記載されている。もともと昭和30年代前半には文学部新聞学科は、当時の新聞界の飛躍的な発展に伴い、文学部内で最も人気があり最大の学科となっていた。そしてすでに1958（昭和33）年には社会学部増設趣意書が文学部教授会で議論されている。その後、「広報学部」としての設置の動きなど紆余曲折を経て、結局1966（昭和41）年になって、やっと正式に設置準備委員会が認められ、本格的な設置への準備が始まったという。

「新聞学」という、旧来の学問分野や方法と異なる学科を中心として学部運営が可能なのか、社会学部という新しい学問分野の枠組みの中にどんな学科を置くべきなのか、そして学生を収容する施設をどうするのかなど、多くの解決すべき課題があり、関大の学部新設にはもっとも長い時間を要することとなった。

1967年の開設時の日本社会は、東西の冷戦構造の中で激しく動いていた時代である。ベトナム戦争が拡大し、アメリカ軍は、後に問題となる「枯葉剤作戦」を実施し、いよいよアメリカは泥沼に入り込んでいった。また日本は、戦争の影を感じて反戦運動も活発化し、第一次羽田闘争では流血の惨事となった。もちろん、高度経済成長の中、ますます所得は増大し、“3C”に象徴されるように、マイホーム主義の下、消費生活も拡大の一途をたどってはいたが、その一方で高度成長の影として公害も広がり、「四日市ぜんそく訴訟」が提訴された年でもある。さらに東京都知事には美濃部亮吉が初の革新都知事となるなど、経済と政治が激しく動き、衝突する年であった。

またテレビ受像機が2000万台を突破して、テレビから発信されるさまざまな文化が社会

の風俗と流行、そして先の消費生活を先導しき、本格的なテレビの時代を迎えていた。グループサウンズと「若大将」が高度成長を謳歌し、「小指の思い出」が文化の爛熟の兆しを歌った一方で、「帰ってきた酔っ払い」の学生フォークから、若者の体制への「反抗」が芽生え、学園紛争の兆しも見え始めていた。

こうした社会と文化の状況が、社会学部を必要としていたといえるだろう。変化し続ける社会と、その中で生まれ大きく成長する新たな文化、新たな生活に対し、これまでの法学、文学、経済学、商学といった枠組みや視点からではなく、新しい視点と方法が求められ、そして、それは受け入れられたのである。

設立初年に入学した学生は1部794人、2部60名で、「団塊の世代」の1948年生まれを中心にした受験生たちだった。さらに教員は12名で出発している。

社会学部入学一期生の記憶によれば、「社会学部」といっても「歴史を学んでいるのか、地理を研究するのか」などと言われたというし、就職活動時、企業からの求人にも社会学部が含まれているのかどうか心配したという。それほどに、「社会学」や「社会学部」の知名度は低く、また初年度は「天六」学舎での授業であったために、現在も語り継がれる「関西“外”大」という言葉が社会学部に投げかけられたという。

ちなみに、現在の第3学舎は学部創立の翌年1968年3月に竣工したが、村野藤吾の設計で、当時モダンな建物として他学部生から羨ましがられた。

その後、高度成長期から73年のオイルショックを経て、学生運動は沈静化し、CM「猛烈からビューティフルへ」が時代を象徴するCMのコピーとなったように、猛烈サラリーマンに対して、ビューティフルな文化を身につけた社会学部生を輩出する時代となった。そして、80年代から90年代、バブルの時代とその崩壊を経ても、「関関同立」と呼ばれる主要大学に位置することになり、第二次ベビーブームの学生たちがますます社会学部に押し寄せることとなった。

そして、40年を経た現在、専任教員50人を擁し、関西大学をリードする学部で成長し、多くの研究者がさまざまな業績を上げ、また熱心に学生を指導している。しかし、不惑の年を越えた今、大学の内外が大きく動く時代となっている。少子化の中、大学進学希望者は減少の一途をたどり、「大学冬の時代」や「大学競争時代」といわれ、本来の研究における競争以外の“競争”を“強い”られ、また、グローバル化の時代、社会学部の役割を問い直す声も出ている。社会学、いや学問に何ができるのか、大学教育に何ができるのか、古くからの問いではあるがきわめて今日的な問いとして、今改めて問い直されている。お

そらく簡単な解答はない。しかし、現代におけるその模索と更なるチャレンジとして、社会学部では創立40周年を機に“Sociology Next40”が掲げられた。次の40年の社会と人間のあり方を考えようというものだ。地球的規模での環境問題をはじめとして、戦争、差別、貧困、宗教、アイデンティティなどなど、そして、次の世代に何が残せるのか、どんな社会が可能なのか、どう地球と人間を存続させるのか、そしてわれわれ自身がどう生き、どう死ぬのか、われわれ社会学部の研究者が取り組むべき課題はあまりに多い。

2008年3月

社会学部長

黒田 勇